

Ⅱ 特別シリーズⅡ

※現在、さくらサイエンスプランは新型コロナウイルスの感染防止のため、今年度のプログラムの実施を延期しています。

科学技術 振興機構 『さくらサイエンスプラン』友情と感激

第221回

早稲田大学の活動報告



浅田 匡 (早稲田大学 人間科学学術院教授)

日・タイの 人材育成交流プログラム

① 人間科学的視点に立つ

日本・タイの人材育成交流へ向けて、タイのCPグループ(タイ最大手の企業グループ)が設立したパンヤーピアット経営学院の学生の10名の招聘を行い、鉄道と地域開発(株西武鉄道)、産業廃棄物処理を中心に環境問題への取り組み(石坂産業(株)、環境変化に対応した農業の改革(埼玉県農業技術研究センター)、埼玉県農林公社種苗センター)、高齢者へのケア(明生リハビリテーション病院)、小学校教育の実態や学校教育におけるICT活用(所沢市立明峰小学校)と、現代社会における問題を中心にその問題解決のための技術活用、またそれらの問題へ対応するための異文化交流や協働ということをトピックとして2019年12月15日から1週間間のプログラムを実施した。本プログラムの



西武鉄道との懇談



リハビリ病院の見学

目的は、それぞれの企業等の取り組みと早稲田大学での研究を紹介し、両国の人々のウェルビーイングという視点から、将来的には日本、タイにおける科学技術を活用し活動できる人材の育成と人的ネットワークの基盤を形成することである。

プログラム	1日目	バンコクより到着
	2日目	所沢市立明峰小学校にてICT活用の授業参観、タイダンスによる交流活動 西武鉄道本社訪問 (ロジスティックスと観光、海外就労の経験)
	3日目	産業廃棄物処理を主とする石原産業を訪問 (工場見学と産業廃棄物処理と環境問題の講義) 早稲田大学大学院生による環境問題に関する研究発表と討議
	4日目	小学校算数授業におけるICT活用に関する 早稲田大学学生との協働ワークショップ 明生リハビリテーション病院の見学と高齢者医療についての講義
	5日目	埼玉県農業技術センターを訪問 (農業改革と技術の活用についての講義と施設見学) 埼玉県種苗センターを訪問 (品種改良等の講義と施設見学)
	6日目	日本未来科学館訪問 早稲田キャンパスにてプログラムの総括と終了式
	7日目	バンコクへ帰国(羽田空港にてお別れ)

② プログラムの内容と成果

特に本プログラムにおいて、招聘学生から評価が高かった活動として、(1)日本企業での働き方について経験談(西武鉄道)、(2)リハビリテーション施設の見学、(3)農業における先端技術活用、(4)教育におけるICT活用のワークショップ、が挙げられる。その他、日本科学未来館などの施設見学も有意義であった。加えて、小学校と大学においては、招聘学生が練習してきたタイの民族衣装でのタイダンスを演じ、小学生や大学生にダ



早稲田大学学生とのワークショップ



農業技術研究センターにおけるドローンの活用を見学



早稲田キャンパスでの集合写真

今後ますますサイエンスプランを継続し、環境問題、高齢化問題や認知症への対応などよりテーマを絞り込んだプログラム内容を構成し、人間科学の視点に立つ人材育成交流の拠点作りを目指していきたい。このような新たな人材育成交流の足場かけの機会をいただきたいJSTをはじめ関係者協力者の皆様に深く感謝する次第である。

③ 農業における先端技術活用
埼玉県農業技術研究センターにおいて、コマの栽培方法が温暖化という環境の変化にいかに対応していくか、の講義を受け、稲の生育状況の把握技術、また交配による品種改良について理解を深めた。特に、ドローンを活用した稲の生育状況と肥料との関係
(3) 農業における先端技術活用
埼玉県農業技術研究センターにおいて、コマの栽培方法が温暖化という環境の変化にいかに対応していくか、の講義を受け、稲の生育状況の把握技術、また交配による品種改良について理解を深めた。特に、ドローンを活用した稲の生育状況と肥料との関係
(2) リハビリテーション施設の見学
高齢者のケアに関して、リハビリテーション病院の施設見学を行った。タイにおいてもヨーロッパからの定年退職者の移住を含め高齢者へのケアが問題になりつつあるということであり、ホスピタリティという視点から日本の施設、また運営は大変参考になったようである。

④ 今後の展望
は興味深く、タイでのコマ生産にもつながる経験であった。
(4) 学校教育におけるICT活用と
早大生との共同ワークショップ
所沢市立明峰小学校を見学した経験を踏まえ、小学校算数デジタル教科書を活用し、児童の理解度を上げるなどの授業改革の可能性を招聘学生と早稲田大学人間科学芸術院学生との協働によるワークショップを行い、各グループによる発表と評価を行った。学校教育システムやICTの整備状況などの違いを超えて、両国の学生が協調して課題に取り組み姿が見られ、相互理解が深まった活動となった。互いに文化の違いなどによる教育に対する見方・考え方の違いなどが顕著にあらわれ、異文化交流をすることも意義が明確になった活動であった。
以上から、ウェルビーイングという問題を、技術・環境、教育、高齢者(健康)、またロジクスと地域開発という多様な視点からまた将来両国のいずれかで働くというライフプランとも照らして、学生間の協働が行われたことは意義があったと評価できる。また、本プログラムの評価に関して、招聘学生全員が日本での就労あるいは留学を希望すると評価をしていた。その意味で、日本・タイとの人材育成交流の足場かけができたと思われる。

③ 今後の展望
箇所協定を結んでいることもあり、その後、本学学生も2020年2月にタイを訪問し、附属中等学校での日本文化の紹介、大学での異文化論の講義への参加と学生交流などを行い、招聘学生との再度の交流が活発に行われた。このプログラムを契機に、学生間の交流が活発化するとともに、学生のタイでのインターンシップなどのサポート体制の確立へと人材交流活動が展開しつつある。今後、ますます大学だけでなく、所沢商工会議所のご協力をいただきながら、産学が連携した人材育成の交流が発展することが期待される。